

第5回新鋭俳句賞

正賞

「落葉松霧氷」三十句

伊藤幹哲

落葉松霧氷

みづうみに雪降りそむる初湯かな
立春や杉の根方に射すひかり
明け方の鳥啼きのぼる班雪山
立子忌の夜空滴るごとくなり
船笛の島を離るる春休
紺青に昏るる沖あり初燕
花散るや己がひかりを追ふやうに
花檜のにはふ真闇となりけり
マロニエの葉かげ踏みゆく立夏かな
花桐や黎明に聳つ双耳峰
てんと虫子の掌に微熱あり
上潮の打つ石垣や花梯梧
沖雲の波立つ夜なり蚊遣香
虚空より碧きみづうみ罌粟咲けり
太々と黒々と干す昆布かな
溪底に瀬音激ちぬ朴の花
笹舟の流るる夏至の片明り
揚舟に日の照り返す立葵
水打つて人待つ心定まれり
白雲に白雲触るる山開
溜息のごとく風来てアマリリス
水澄むや枝さしかはす棗の樹
遠嶺より風立つ鷹の渡りかな
火口湖を夜雲おほひぬ十三夜
峡空に白き山聳つ枯芙蓉
マフラーに朝日の匂ひふくらみぬ
月明の山頂に雪炎立つなり
暁闇の鶴唳胸に降りにけり
凍滝の中ひびきあふ水音あり
銀環を背負ふ落葉松霧氷かな

第5回新鋭俳句賞

準賞

「大樹」三十句

金澤諒和

大樹

落第の子に珈琲のただ熱し
少年のクラブは素手ぞ風光る
一つづつ椅子を残して卒業す
話し掛けたくなる空や半仙戯
入学児まづ早起きを褒めらるる
勾玉に水の手触り春の月
遠足の校舎一日眠りたる
子の拳立夏の窓を叩きけり
薫風や額集めて描く地図
水面暮れ水底暮れて初螢
滴りの他は時なき伽藍かな
父の日の父のペン先乾かざる
青梅雨の校舎大樹の香を放つ
帰省子の靴を真中の三和土かな
十薬に夜の雨脚の整ひぬ
大樟の蔭の中なる晩夏かな
吾が頬を撫づる風へと門火焚く
革靴に歩く校庭終戦日
少年に四股名はあらず草相撲
アンカーに競ふ双子や秋の空
靴箱の酸っぱき匂ひ運動会
甘藷抱ふ児の両肘の泥塗れ
立冬の空の深さを言ふ子かな
時雨忌の世界へ開く河口かな
七五三すでに鼻筋確かなる
伐られてはならぬ聖樹となるまでは
去年今年胎児は海を抱きたる
熱爛の教師に明日のありにけり
子守唄忘るる頃の海鼠かな
マスクして抱き合ふ子らよ春隣

第5回新鋭俳句賞

準賞

「孤村記」三十句

玉木たまね

孤村記

湧き水の零るるごとく子蛇落つ

岩魚焼く山椒味を腸わたとして

蚊に尋ぬわたくしの血はまだ赤か

山神の寢息のごとき濃霧かな

鹿泳ぐ湖うみの薄皮剥ぐやうに

目を縦に回し牡鹿や草食める

止め刺しの刃に蒼穹や鹿の眼にも

鼬吊る喰はれし鶏とろの首の前

剥製に見張られてゐる狩の宿

くつくつと咲む大鍋の猪頭しじみたま

どぶろくに今宵つま先から眠る

無口なる獵夫や犬語堪能も

この道は姥捨の道けふは雪

注連繩にぬかづき吾も獵犬も

念仏を白く吐き出す獵夫かな

ゴドー待つやうに二人や狩場の木

積みあがる骨呪術めく獵師小屋

誰も彼も美しき指獵夫一家

熊を撃つ綺麗に死ねるやうに撃つ

熊の腹裂く軽トラの腑分け台

魂も抜き去り熊の血抜かな

影だけを生理にして夕枯野

川より上がり細き犬夕焚火

仔熊飼ふ母熊撃ちしその夜より

血を乾杯す熊鍋に与れば

身語りは北の訛りや老獵夫

遠吠えの長さに氷柱そだちゆく

山眠る仔犬座そばに遊ばせて

死化粧めきて孤村の桜隠しかな

獣にはなれぬ吾が身や落椿